

日本学術会議 総合工学委員会・機械工学委員会合同  
工学システムに関する安全・安心・リスク検討分科会  
老朽および遺棄化学兵器の廃棄に係るリスク評価とリスク管理に関する  
検討小委員会（第24期・第1回）議事録

1. 日時 平成30年4月26日（火）15:00～17:00  
2. 会場 日本学術会議6階 6-1(A)会議室  
3. 出席委員 朝比奈潔 岸田伸幸 桑原保人 高木和広 藤原修三  
古崎新太郎 松岡猛 水野光一 山内博 横田真（50音順）  
4. 議事要旨

1) 役員を選出（資料1）

原案通り、委員長：藤原修三、副委員長：横田真、幹事：岸田伸幸で承認された。

2) 今期の活動方針について（資料2）

横田副委員長より、準備会合（2/5）で議論された内容の紹介があり、それを踏まえて今後の活動方針について意見交換が行われた。その結果、前期から継続的議論してきた文書については、安全工学シンポジウムの前の6月26日（火）に次回小委員会を開催し、そこで小委員会としての案をとりまとめることとなった。

併せて横田副委員長より、3月末に内閣府遺棄化学兵器処理担当室を訪問した際の概要紹介とともに、安全工学シンポジウムへの講師派遣依頼について、担当室長より検討する旨の回答があったとの報告があった。

3) 安全工学シンポジウム2018参加について（資料3、4）

藤原委員長より安全工学シンポジウム2018で当小委員会が主催するオーガナイズセッション（以下、OS）の概要の紹介があった（資料3）。続いて古崎委員講演予稿（資料4）の紹介があった。

4) 第24期報告書の編纂について（資料5、6、7）

冒頭横田副委員長より、小委員会でのとりまとめから学術会議としての報告書発出までの段取りとともに、大体半年程度かかる旨の紹介があった。

その後、20180426版報告書案（資料5）について、岸田幹事より説明があった。

山内委員より、本事業のリスクの根本はヒ素の問題であること、中国を始めとして海洋投棄化学兵器問題を抱えるバルト海沿岸諸国、特にノルウェー、ドイツ、オーストリアから高水準なヒ素関係報告が出てきており、日本もこの分野により注力すべきであるとの指摘があった。

本報告書案については、5月末迄に各委員がコメントを提出し、それを踏まえた当小委員会最終版を次回会合にかけて決定することとなった。

## 5) その他（今期報告書表出後の活動方針について）

報告書表出後の当期小委員会で何を行うべきかについて意見交換を行った。主要コメントは以下のとおり。

山内委員) ハルバ嶺の作業者向けにしっかりした労働衛生対策を確立し、遵守させるとともに、その結果をフォローし、対策をとっていくことが重要。

横田副委員長) ヒ素処理については老朽化学兵器の処理という形で日本国内でも実施されており、内外の化学兵器処理に係る全情報が一カ所で検索・閲覧できる仕組みが有用。併せてヒ素問題に関してどういう情報を集めておくことが必要かをまとめておくことも重要。

山内委員) ヒ素曝露量算定基準を固めるとともに、世界水準の最新基準で今後の老朽・遺棄化学兵器処理作業を行い、従事した全労働者のヒ素曝露有無を検査し、全く疑いの余地がない報告書を全員分作成しておくことが、将来役に立つ。

朝比奈委員) 神戸製鋼のヒ素曝露防止対策は、想定される吸入、摂食、接触の3経路からの曝露につき経路の清浄保持と現状の把握を行っている。ヒ素曝露の世界的科学的基準の項目・数値と測定方法を報告書に書くことは有益。

水野委員) ヒ素問題に限らず本事業担当者の支援に役立つ基盤的情報を集めることが小委員会の意義。

閉会時刻になったため、次回会合日時を6月26日(火)15時～17時とすること、今期報告案への修正提案を5月末迄に提出することが確認された。そして、委員長は、親分科会が所属小委員会議事録をインターネットで公開することを決定し、会合日から8週間以内に議事録を確定することが必要になったため、従来の議事録作成プロセスを改め、2～3週間以内に議事録案をメール持ち回りで確認の上、委員長が確定させる形で取り進めることを提案して出席者一同の了解をとった後、閉会となった。

以上